

# 倉敷市矢部南向遺跡の発掘調査

澤 山 孝 之

## はじめに

今回報告するのは、一般県道高松下庄線道路改築工事に伴い、岡山県倉敷地方振興局（当時）の依頼を受け、岡山県教育委員会が昭和57年度に発掘調査を実施した倉敷市矢部に所在する矢部南向遺跡（第1図）の発掘調査の成果である。発掘調査は昭和58年1月19日～2月18日に岡山県教育庁文化課（当時）職員 岡田博・中野雅美が担当して、実施した。調査面積は120㎡である。岡山市北区高松と倉敷市下庄とを結ぶ一般県道高松下庄線の改築工事は、交通混雑の緩和及び交通安全の確保などを目的として計画され、現在は主要地方道箕島高松線の区間の一部となっている。調査の結果、本遺跡は弥生時代～中世の集落跡であることが明らかとなった<sup>(1)</sup>。

## 1 調査対象地の概要

今回報告する矢部南向遺跡は、倉敷市の東端に当たり、岡山市北区加茂と接している。地勢的には、西方の日差山山塊、東方の吉備中山山塊に挟まれた足守川左岸の沖積平野に位置し、当地は自然堤防と後背湿地で形成された同川の氾濫原であったと推定され、多くの集落がこの自然堤防（微高地）上に営まれたと考えられる<sup>(2)</sup>。

発掘調査は先述した道路改築工事に伴うボックス建設部分について記録保存を目的として実施した。調査対象地は、現在の県道73号（主要地方道）箕島高松線の矢部橋の北東端に位置し（第2図、網掛け部）、現在もその周辺は、発掘当時とあまり変わらない田園風景が広がっている。本遺跡の西方約10mには、足守川河川改修工事に伴い発掘調査を実施した足守川矢部南向遺跡<sup>(3)</sup>が位置しており、その成果から、現在ではこの周辺の地表下には、弥生時代後期～古墳時代前期の極めて高い遺構密度をもつ集落遺跡の存在が周知されている。

## 2 発掘調査の成果

### （1）竪穴住居

竪穴住居1（第4・5図、写真1、図版1）

調査時はS H02と称していた。なお、図面・資料などの散逸のため、詳細は不明である。記録写真から、平面形は隅丸方形であり、残存状況は調査区境のため遺構の2隅を欠損している。また、床面では中央穴、その壁際には土坑（ポケット）や壁体溝が確認でき、コの字状を呈する高床部も有する。主柱穴は2本検出している。出土遺物は、土師器の甕1～14、高杯15～21、鉢22～24や小型丸底壺25、小型器台26・27、製塩土器28などが認められる。時期は古墳時代前期初頭と推定される。



写真1 竪穴住居1



第1図 遺跡位置図（1/1,500,000）

## 竪穴住居2（第3・6図、図版1）

調査区東側に位置する。調査時はSH01と称していた。なお、図面・資料などの散逸のため、詳細は不明である。調査記録から平面形は方形であり、残存状況は調査区境のため遺構の2隅を欠損している。規模は1辺約5m、床面積は約25㎡と推定される。ただし、床面構造は判然とせず、この遺構を竪穴住居と評価することは難しい。

出土遺物は、須恵器の杯蓋29～35、杯身36～38、高台杯身39～42、高杯43～46、壺蓋47、壺48・49、甕50、横瓶51、鉢52や土師器の甕53・54、杯身55、高台杯身56、皿57～59などが認められる。なお、杯蓋29・30、壺蓋47は杯身の可能性がある。時期は7世紀後半～8世紀初頭の範囲と推定される。

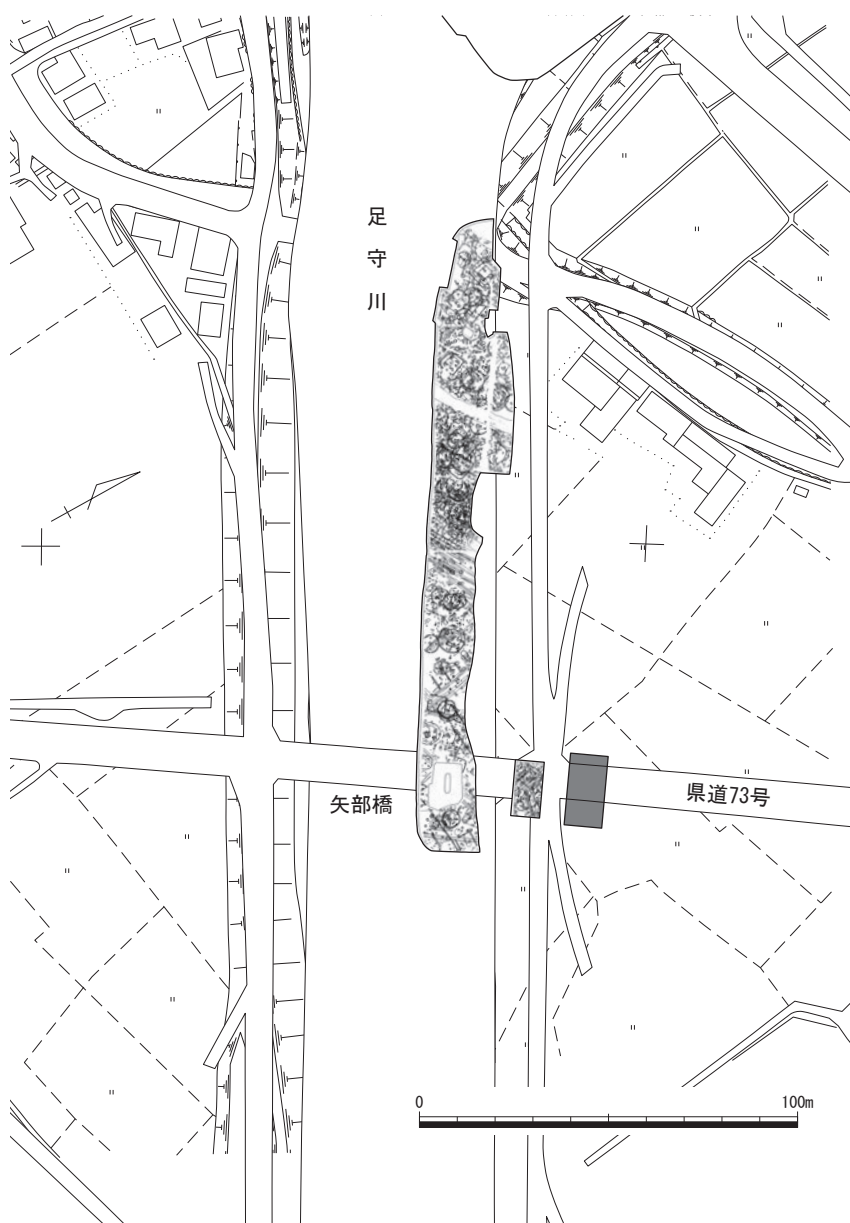
## （2）掘立柱建物

### 掘立柱建物1（第3・7図）

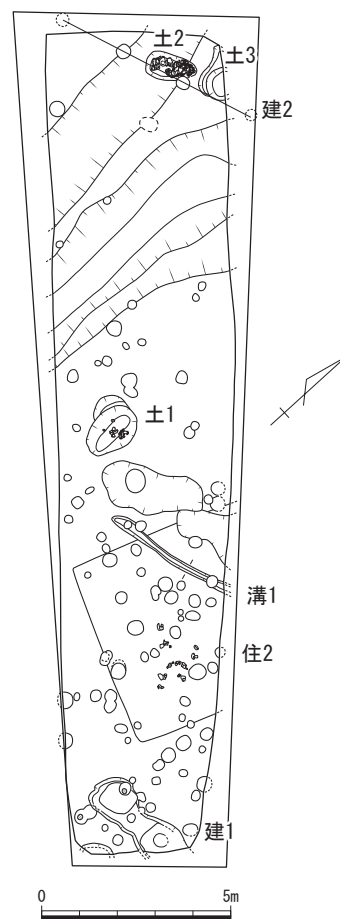
調査区南東端に位置する。建物規模は判然としないが、柱穴は1辺約90cm、深さ約20cmを測る2基を検出しており、掘り方は方形である。柱間寸法は約180cmである。出土遺物は確認できなかった。時期は調査時の所見により、8世紀代と推定される。

### 掘立柱建物2（第3・8図）

調査区北西端に位置する。建物規模は判然としないが、柱穴は直径約40cm、深さ約30cmを測る4基を検出しており、掘り方は円形である。柱間寸法は約180・201cmである。出土遺物は確認できなかった。時期は調査時の所見により、中世と推定される。



第2図 調査区位置図（1/2,000）



第3図 調査区全体図（1/200）

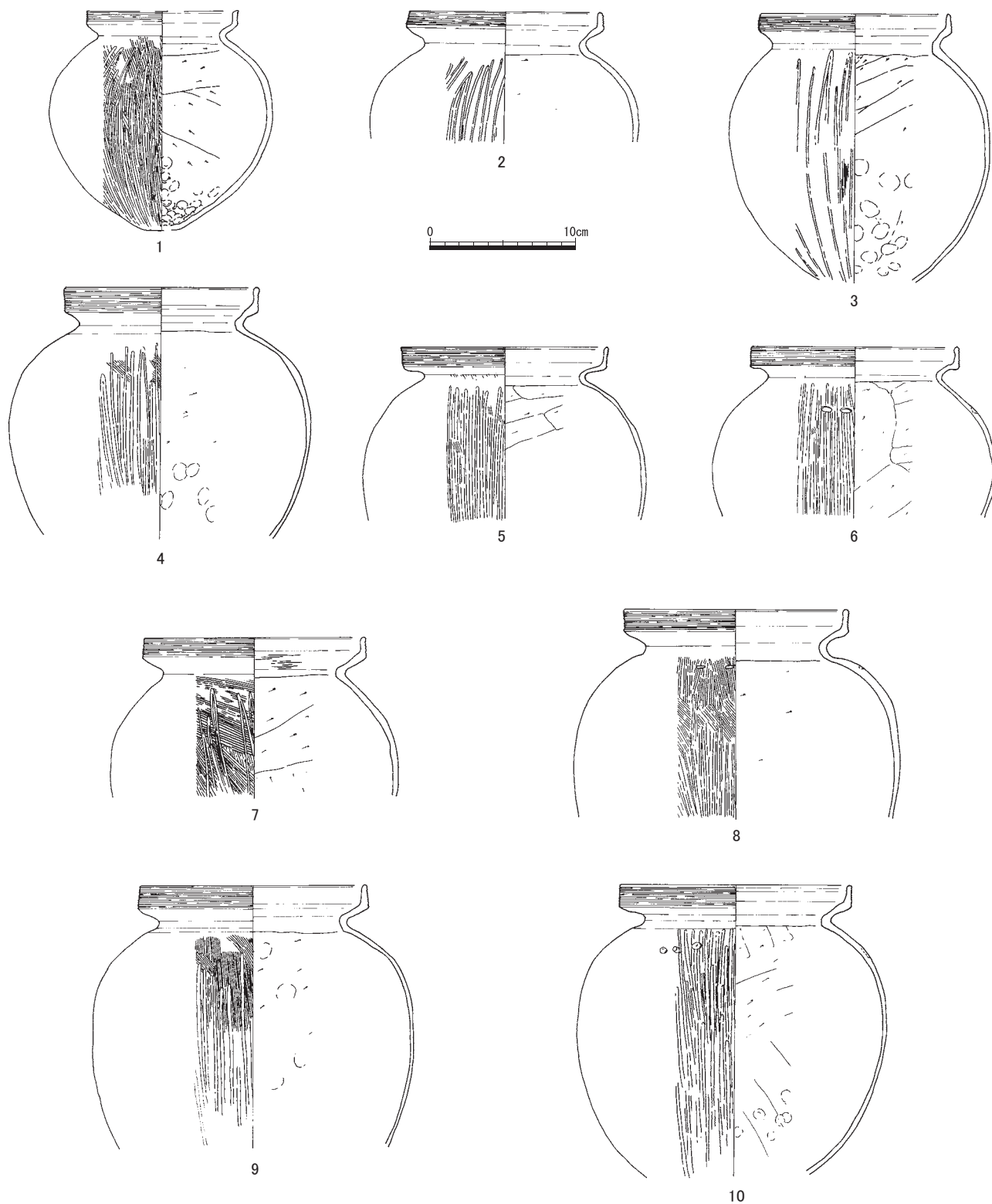


## (3) 土坑

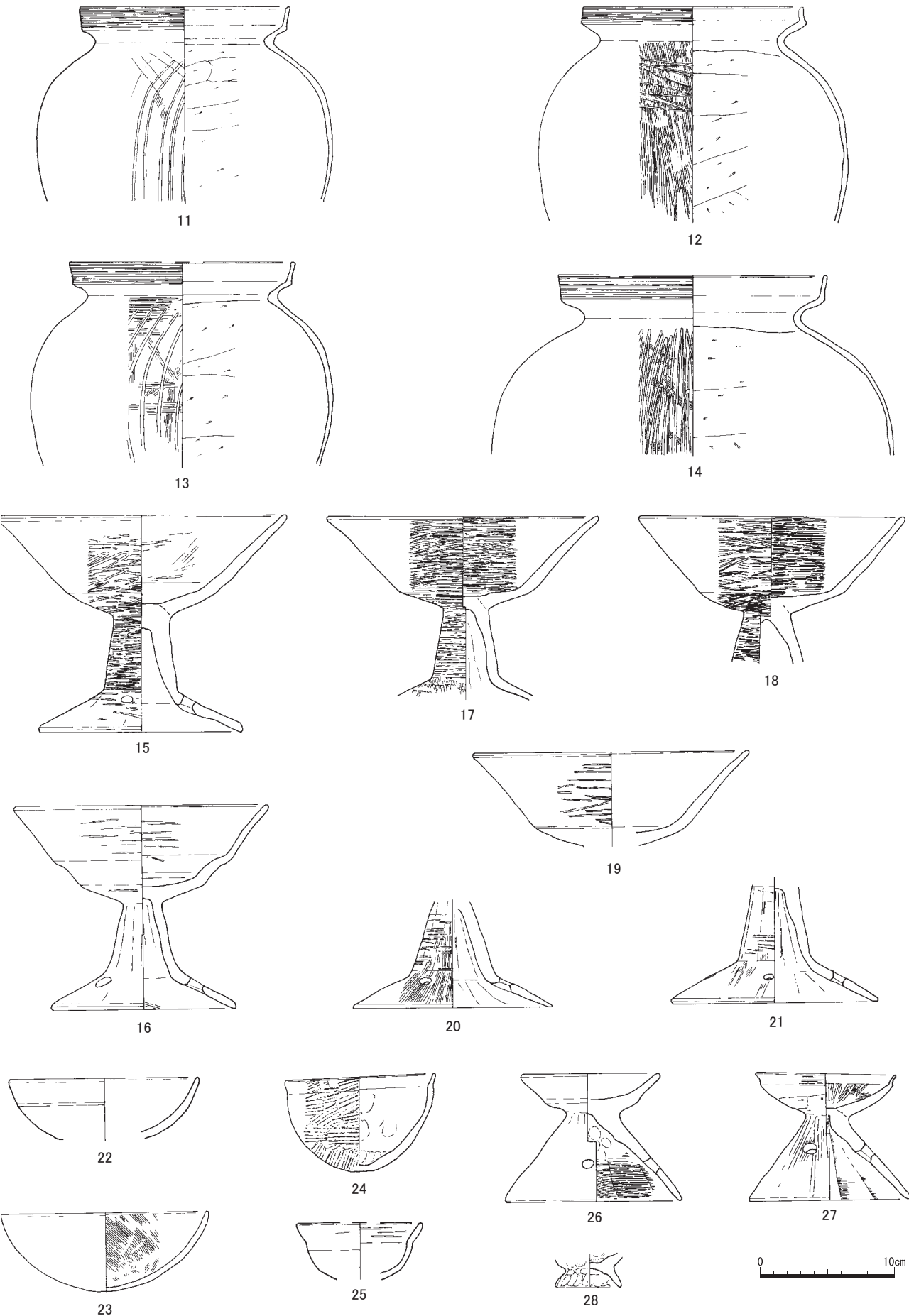
## 土坑 1 (第 3・9 図、図版 1)

調査区中央付近に位置する。調査時は S K 03 と称していた。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈しており、

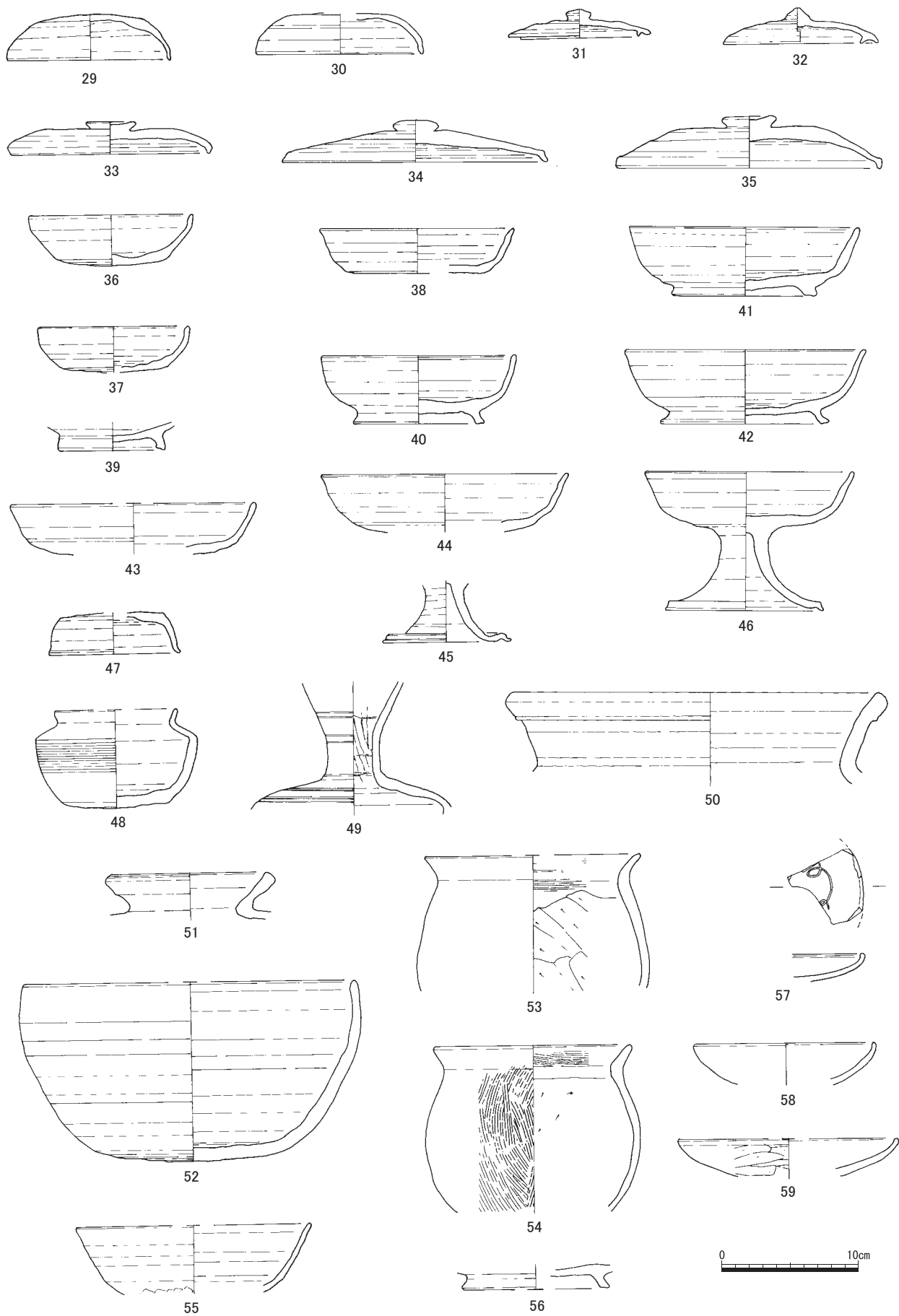
規模は長軸 153cm、短軸 108cm、深さ 15cm、底面標高は 262cm を測る。出土遺物は、弥生土器の壺 60、甕 61・62、鉢 63 などが認められる。時期は弥生時代後期中葉と推定される。



第 4 図 竪穴住居 1 出土遺物① (1/4)



第5図 竪穴住居1出土遺物② (1/4)



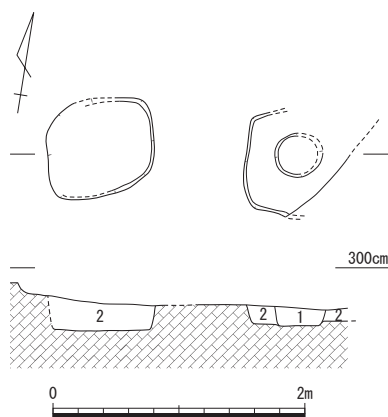
第6図 竪穴住居2出土遺物 (1/4)



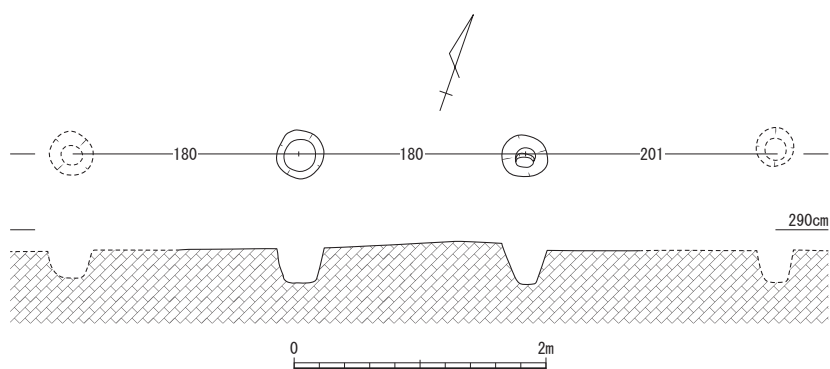
土坑2（第3・10～12図、図版1～3）

調査区北西端に位置する。調査時はS X01と称していた。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈しており、規

模は長軸135cm、短軸75cm、深さ52cm、底面標高は226cmを測る。特に、上層を中心に土器溜りの状況である。出土遺物は、弥生土器の壺64～72、甕73～78、高杯79

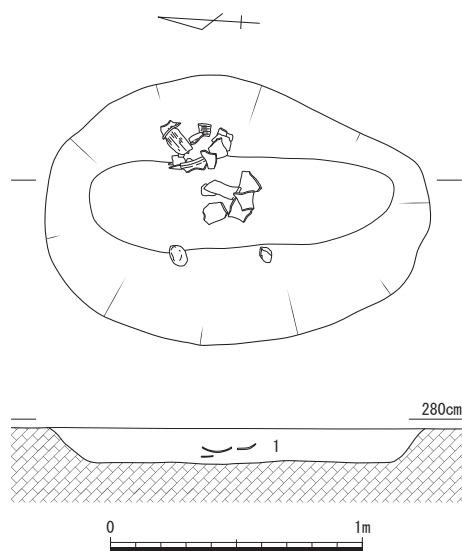


- 1 灰褐色土（ブロック少）
- 2 暗褐灰色土（青色変帯びる）

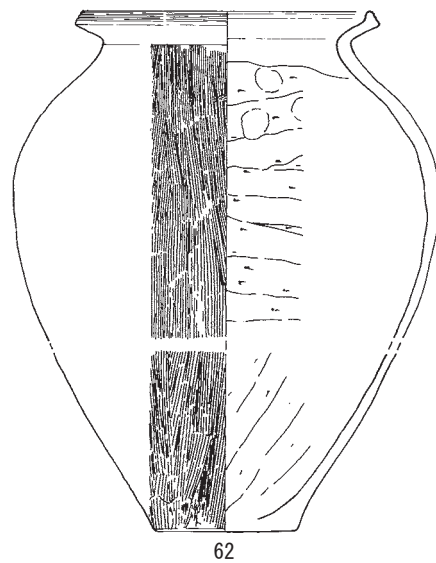


第8図 掘立柱建物2（1/60）

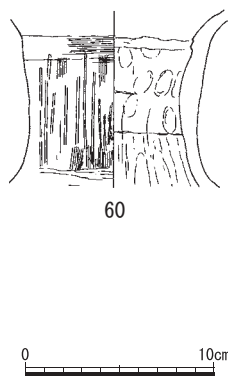
第7図 掘立柱建物1（1/60）



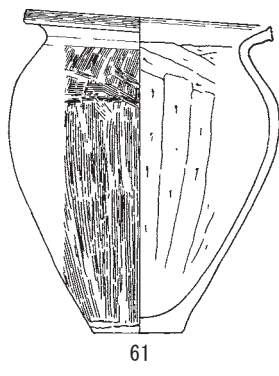
- 1 暗灰黄褐色土（炭・焼土を僅かに含む）



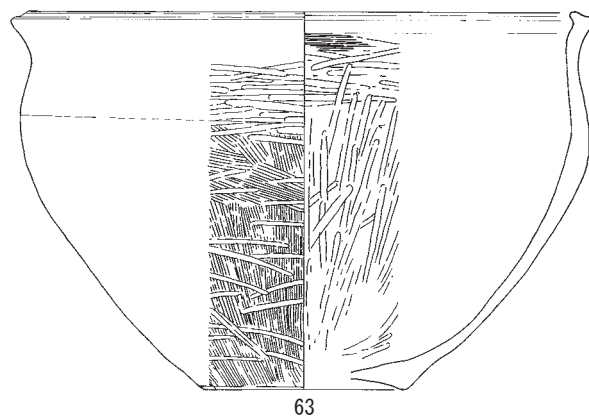
62



60



61



63

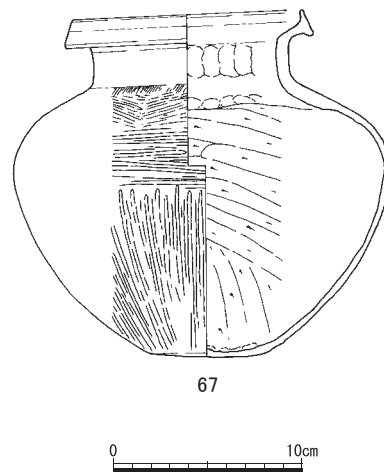
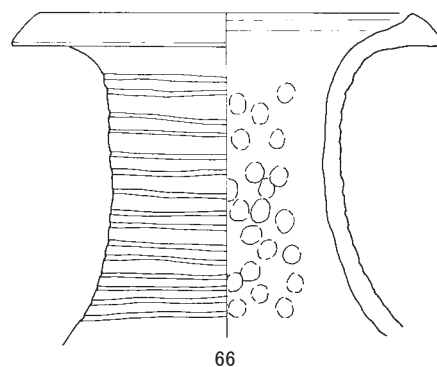
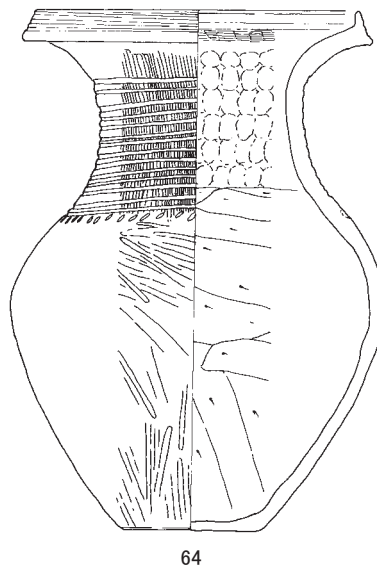
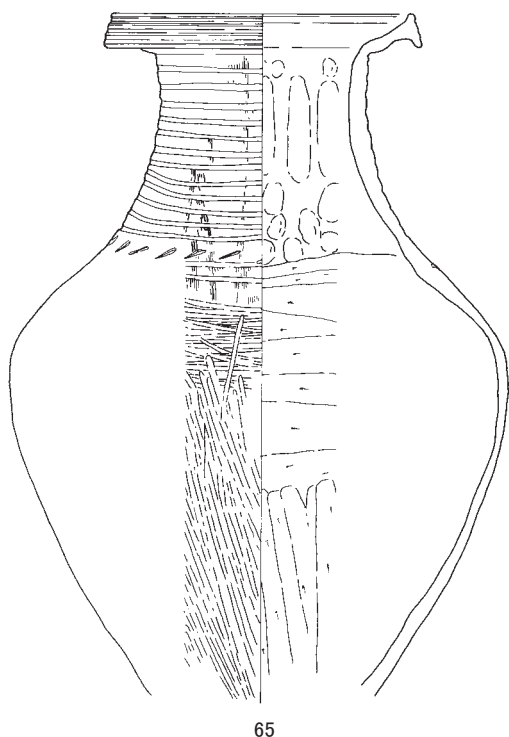
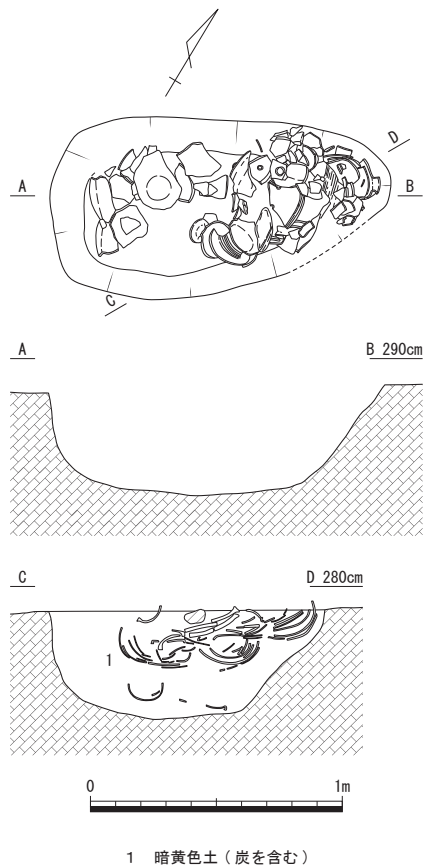
第9図 土坑1（1/30）・出土遺物（1/4）

～81、鉢82～86、台付鉢87などが認められる。時期は弥生時代後期中葉と推定される。

### 土坑3（第3・13図）

調査区北西端に位置する。調査時はS K02と称してい

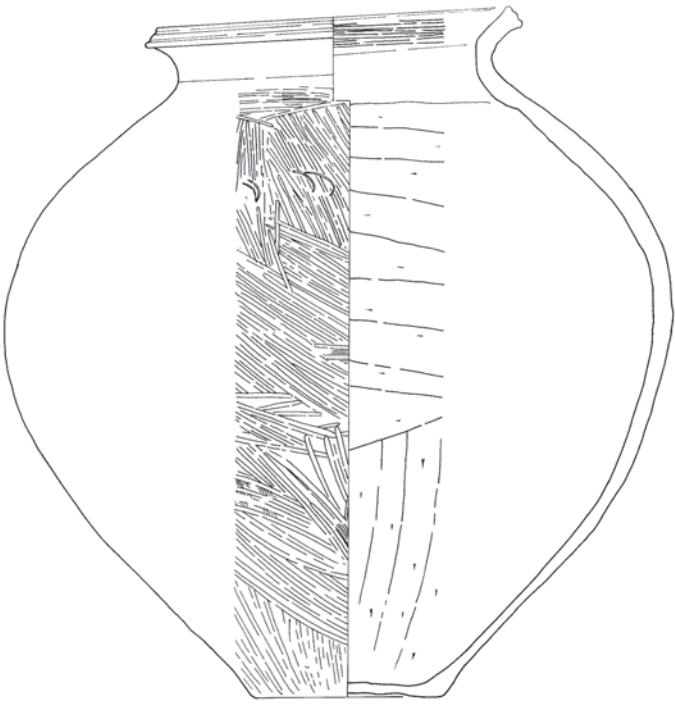
た。残存状況は調査区境のため北東側を欠損している。平面形は楕円形、断面形は二段掘りの逆台形を呈しており、規模は長軸147cm以上、短軸69cm以上、深さ51cm、底面標高は246cmを測る。出土遺物は、須恵器の杯蓋



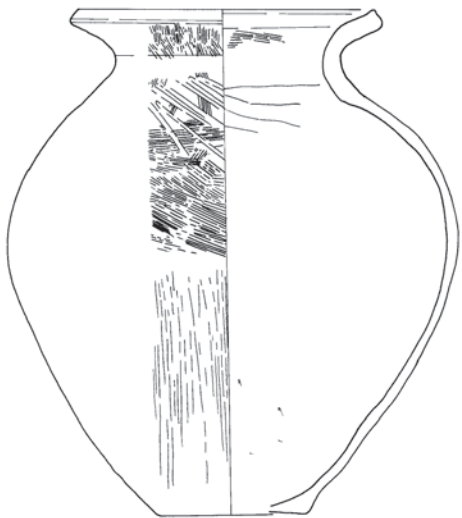
第10図 土坑2（1/30）・出土遺物①（1/4）



68



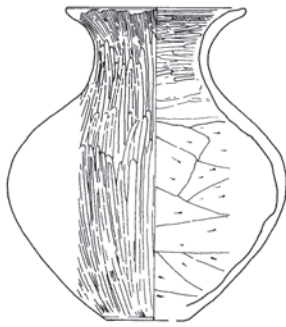
69



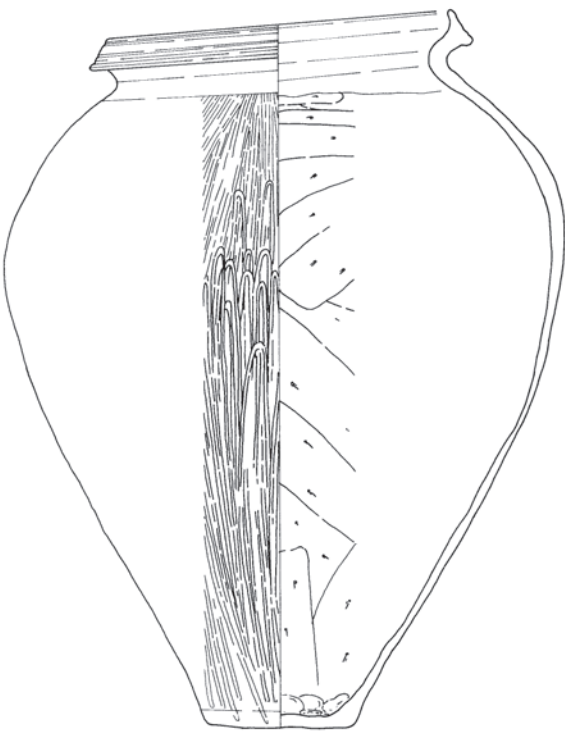
70



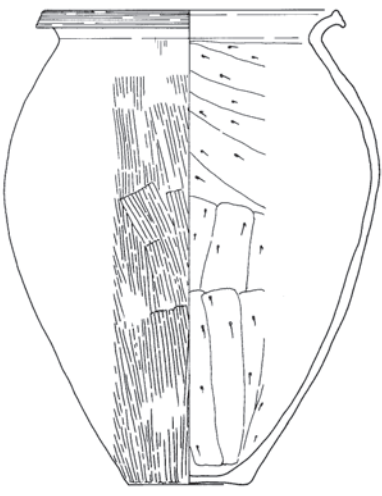
71



72



73

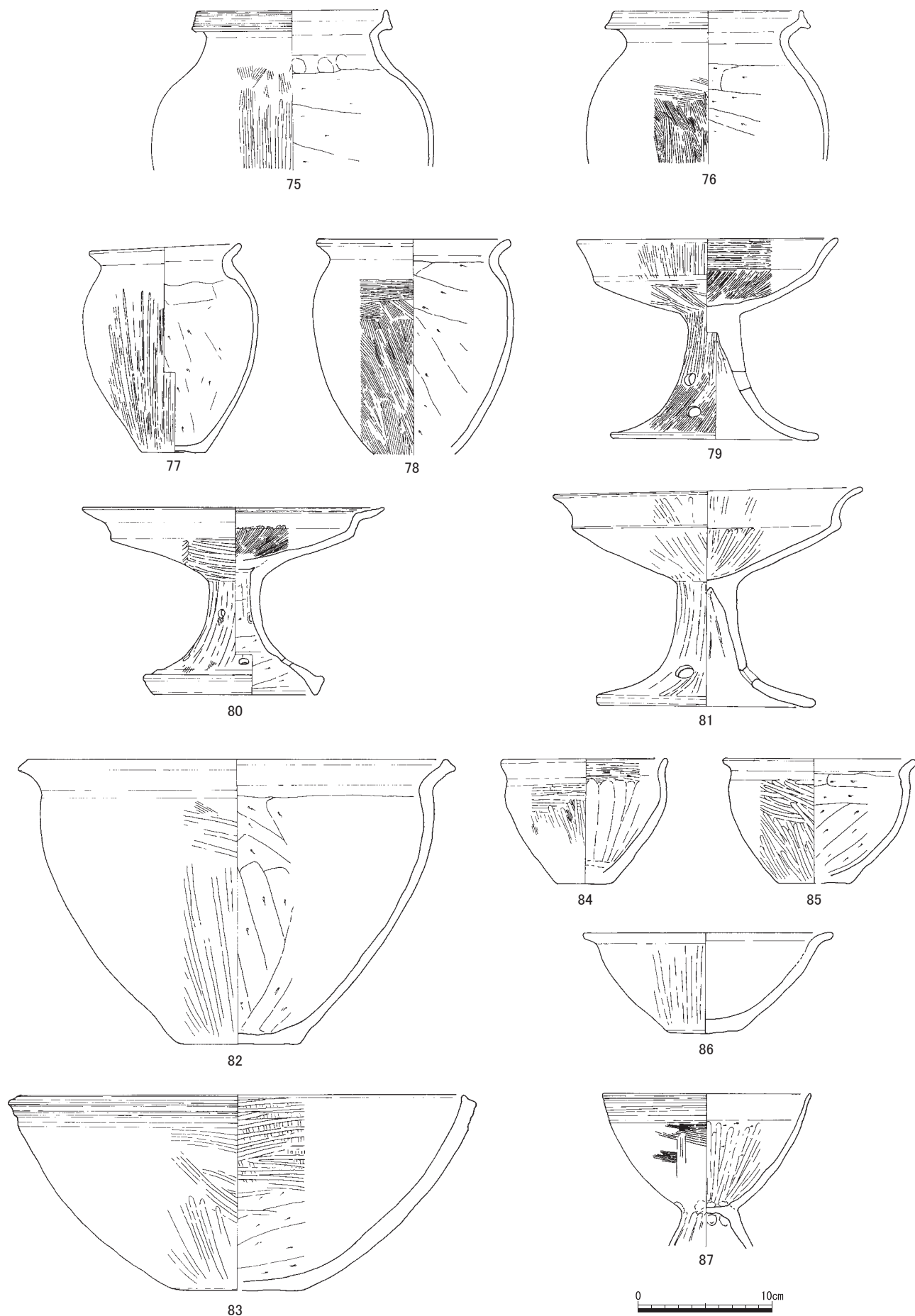


74



第11図 土坑2出土遺物② (1/4)





第12図 土坑2出土遺物③ (1/4)

88、高台杯身89、高杯90などが認められる。時期は7世紀後半と推定される。

(4) 溝

溝1 (第3図)

調査区中央付近に位置する。調査時はSD01と称していた。流路は東－西方向であり、西端は留まる。断面形は逆台形であり、規模は上端幅15cm、深さ6cm、底面標高は298cmを測る。図化し得る遺物はないが、時期は調査時に所見により、中世と推定される。

(5) 柱穴 (第3・14・15図、図版3)

調査の状況から、古墳時代後期～中世を中心に数十基程度の柱穴を検出している。このうち、調査時にP22と称していた柱穴からは、須恵器杯身91、P11・17・10と称していた柱穴からは、順に土師器皿92・93・94などが認められた。一方、P122と称していた柱穴からは土鍾C1、P24と称していた柱穴からは土製円板C2や土鍾C3～C6などの土製品が出土している。

(6) 遺構に伴わない遺物 (第16～18図、図版3)

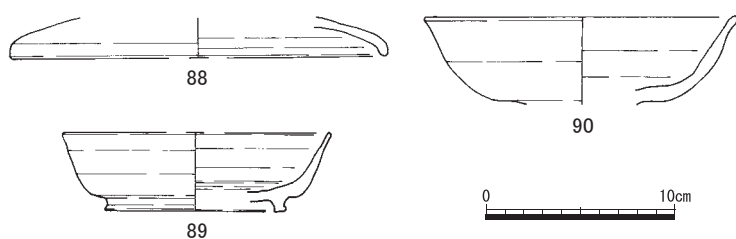
遺構に伴わない遺物としては、弥生土器の鉢95、台付鉢96や土師器の甕97・98、把手鉢99、高台碗100や須恵器の杯蓋101～103、杯身104、高台杯身105、甕106、捏鉢107、鉢108・109、把手鉢110や土師質高台碗111、須恵質擂鉢112や丸瓦113、平瓦114～116などが認められる。なお、杯蓋101は杯身の可能性がある。

また、轆羽口C7・C8、土製円板C9～C14、土鍾C15などの土製品、流紋岩～ディサイト（角閃石の結晶あり）製（鈴木茂之（岡山大学）鑑定）の砥石S1などの石器、釘M1などの鉄器も出土している。

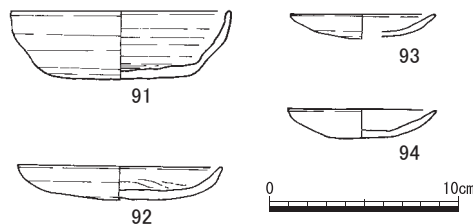
### 3 まとめ

矢部南向遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期及び古代・中世の時期を主体に、足守川の自然堤防（微高地）上で営まれた集落跡である。吉備の中核地域として、弥生時代後期集落（高塚遺跡<sup>(4)</sup>、津寺遺跡<sup>(5)</sup>、加茂政所遺跡<sup>(6)</sup>、足守川加茂A・加茂B・矢部南向遺跡<sup>(7)</sup>など）のあり方は、洪水等の自然環境の変化も考慮すべきであるが、流域一帯を統括する政治的な要因から集合体への何らかの移動の働きかけがなされたことを暗示しており、微高地（各遺跡・ムラ）間相互の再編状況は、いずれはクニへの統合に繋がるとする見方がある<sup>(8)</sup>。弥生時代後期後葉になると、足守川右岸丘陵に位置する楯築遺跡<sup>(9)</sup>やこれに後続する鯉喰神社遺跡<sup>(10)</sup>の墳丘墓が築造される。このことから、同遺跡は首長継承の新たな祭祀形態の出現を契機とした足守川流域の集落の大改編・統合によって誕生した集落の1つと捉えることもできる<sup>(11)</sup>。

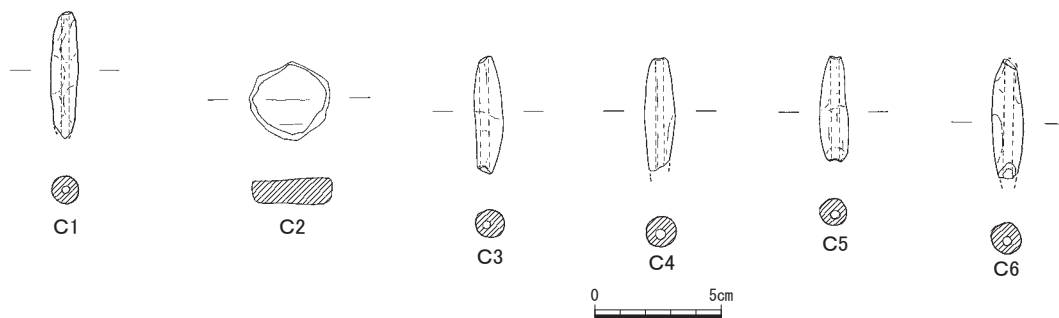
一方、7世紀代の出土遺物をみると、杯H（奈文研分類）に比べて、出土量も少なく流通も限定された器種であった杯G（同）<sup>(12)</sup>の杯蓋31・32は注目される。同遺



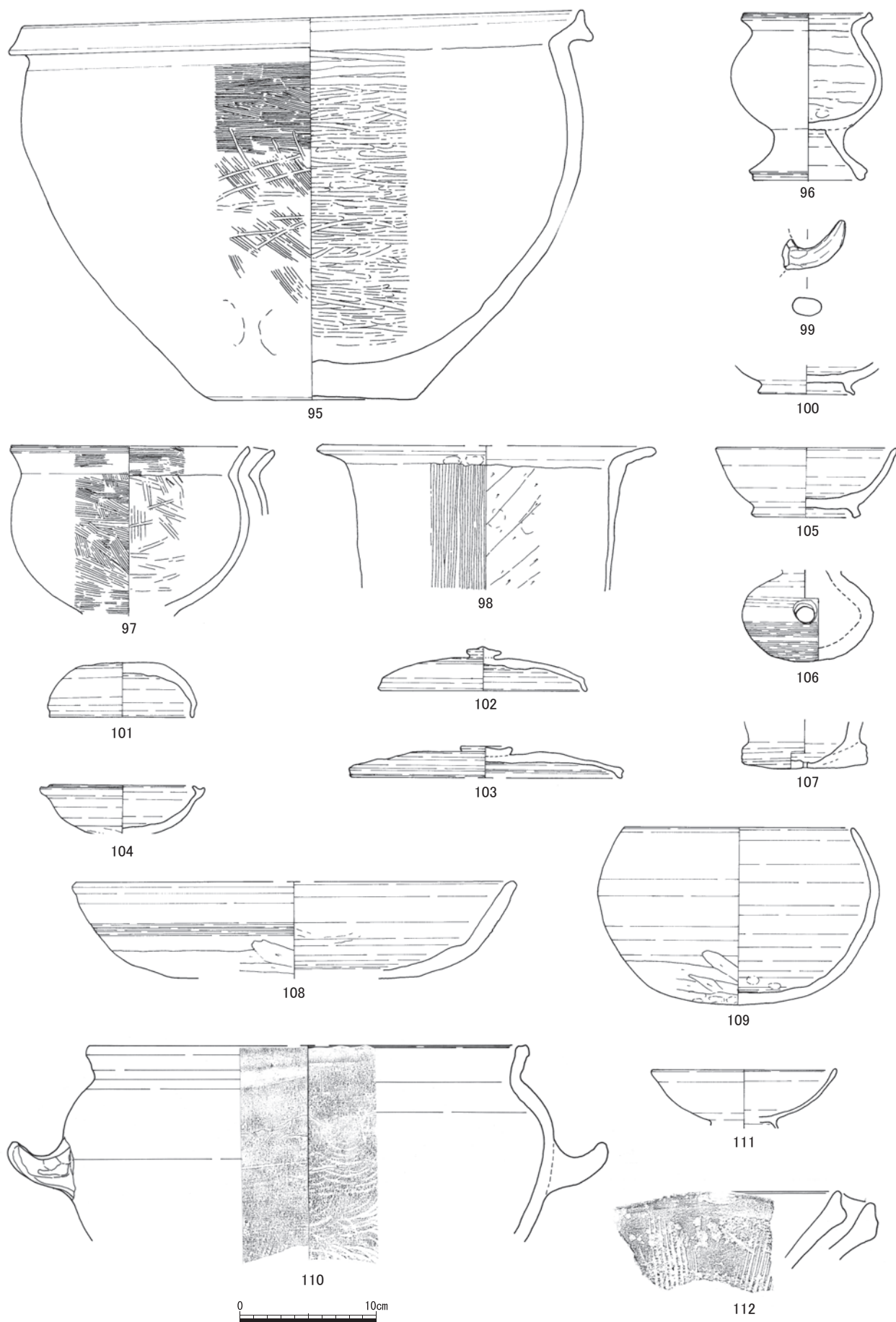
第13図 土坑3出土遺物 (1/4)



第14図 柱穴出土遺物① (1/4)



第15図 柱穴出土遺物② (1/3)



第16図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

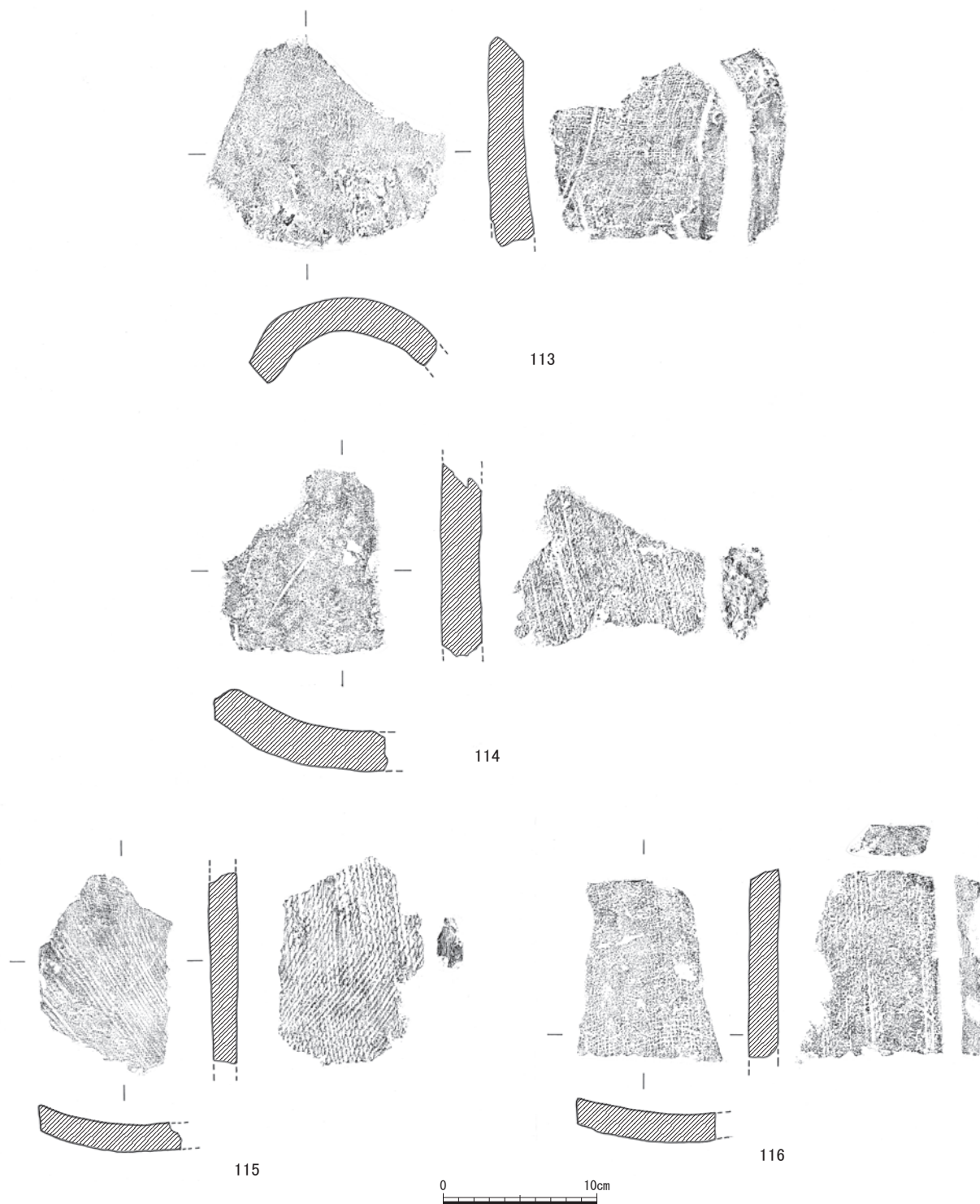


跡周辺では都宇郡の官衙（津寺遺跡）や駅家（矢部遺跡）等の律令体制を担う公的施設の整備が進むが、その前段階にあたる当地の位置づけやこの器種を志向した需要層の存在・性格を考える上で示唆に富む資料と言える。

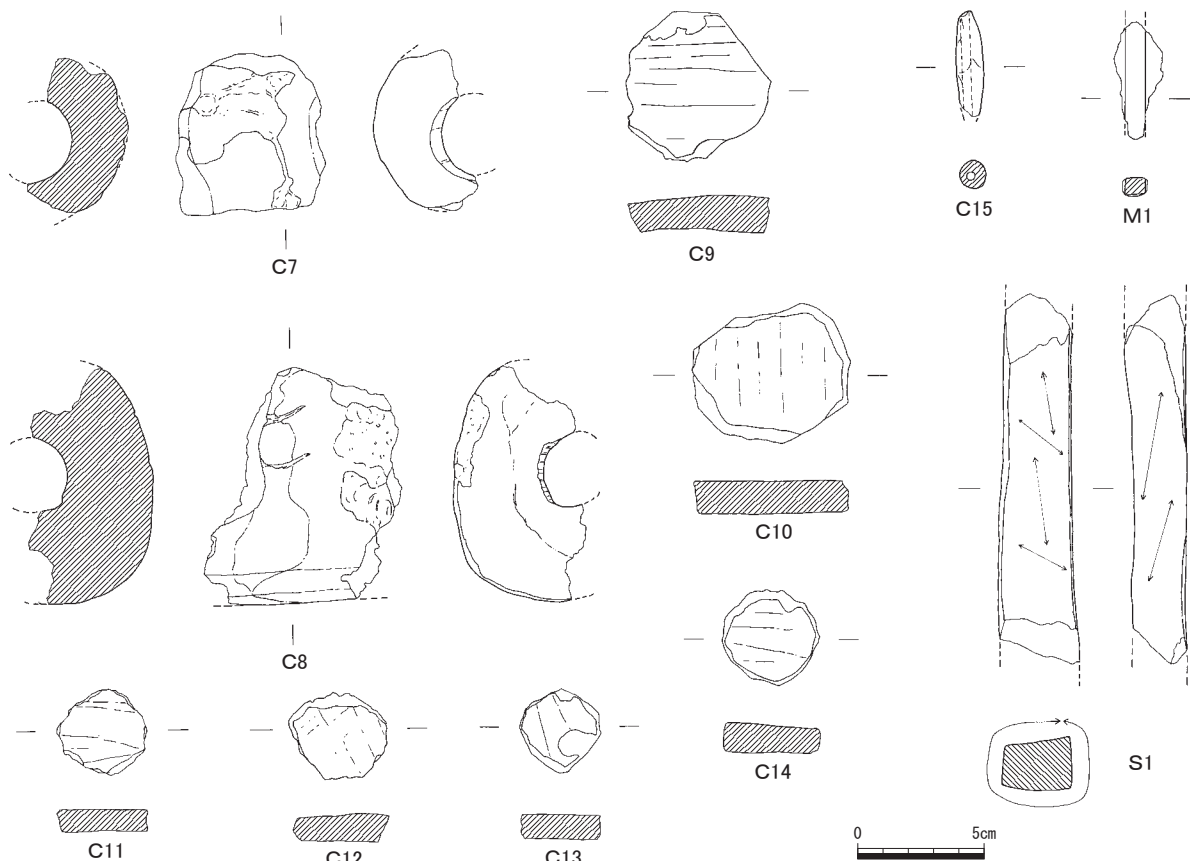
おわりに

当センターでは、過去に県事業関係で発掘調査を実施

して未報告であった遺跡に対して、整理・公開することをこの数年間積極的に取り組んでおり、一部は報告書の刊行を行っている。この度の調査成果の公開は、発掘調査から約40年の月日が過ぎてしまい、また、諸事情により必要十分な体裁とはいえないものの、本誌での報告が地域の歴史研究に寄与するとともに、学術研究の資料として広く役立つならば幸いである。



第17図 遺構に伴わない遺物②（1/4）



第18図 遺構に伴わない遺物③ (1/3)

## 註

- (1) 岡山県教育委員会1983「10 矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』13
- (2) 澤山孝之2022「第1章地理的・歴史的環境」「西加茂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』260 岡山県教育委員会
- (3) 岡山県教育委員会1995「足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94
- (4) 岡山県教育委員会2000「高塚遺跡・三手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150
- (5) 岡山県教育委員会1998「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127
- (6) 岡山県教育委員会1999「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
- (7) 註(3) 文献
- (8) 江見正己2000「第3章高塚遺跡 第4節まとめ 1 弥生時代の集落変遷」「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 岡山県教育委員会

- (9) 近藤義郎編1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
  - (10) 平野泰司・岸本道昭2000「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』第22集
  - (11) 註(8) 文献
  - (12) 金田善敬2013「第4章総括 第5節鬼城山から出土した土器について」「史跡 鬼城山2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』236 岡山県教育委員会
- ※遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- ※収載した遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。
- ※第2図は、「おかやま全県統合型GIS」の「数値地図（国土基本情報）」のシステム共通番号 測量法に基づく国土地理院承認（使用）R3JHs1を使用し、これに註(3) 文献の同遺跡周辺地形図・遺構全体図を加筆したものである。

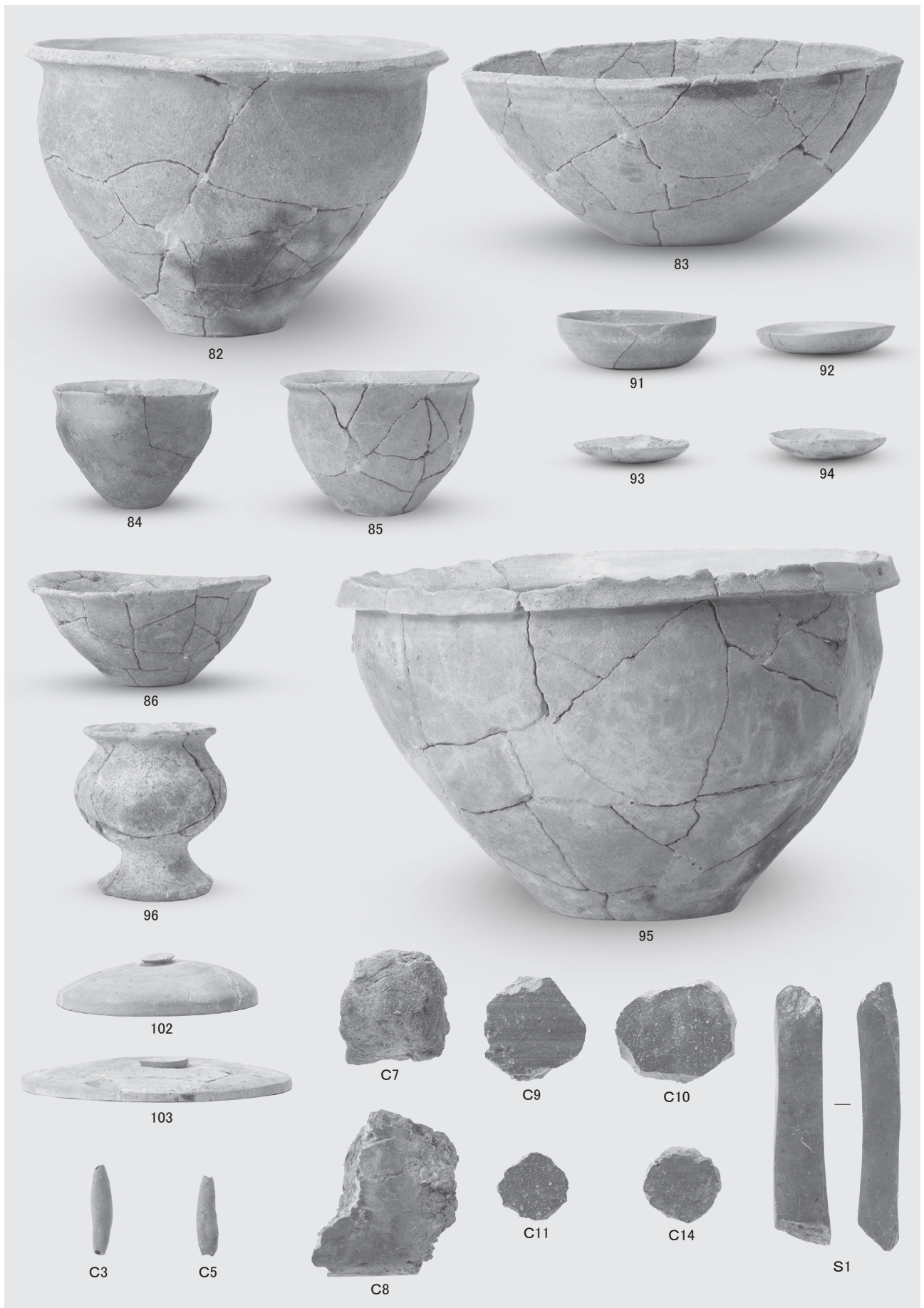


図版1 竪穴住居1・2、土坑1・2出土遺物





図版2 土坑2出土遺物



図版3 土坑2・柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物、土製品・石器